授業探訪　明治大学

# 明治大学史教育の到達点と展望

別府　昭郎

## はじめに

提示された題（テーマ）を見たときいくつかの疑問が胸をよぎった。一番大きい疑問は、「展望」はそれなりに分かるが、「到達点」とはいったい何を意味するのであろうかという疑問であった。

「到達点と展望」を明らかにするには、理屈っぽく言えば、これまでやってきたことの中で「守るべきもの」と「改善すべきもの」を弁別し、これまでの有益な部分は維持し、改変された部分はそれに適合するようにされるべきであって、全体的に切れ目のない連続が自大学史教育として保たれるようにすることであろう。自分の大学の歴史を教授する私たち教師個人が、到達している歴史認識の中での「守るべきもの」と「改善すべきとの」を意味しているのであろうか、それとも大学史を教授する教師集団全体が到達している現時点での認識の中での「守るべきもの」と「改善すべきとの」だろうか、あるいは、学生たちが教育効果として到達した歴史認識だろうか。そう込み入って考えなくてもいいではないかとの意見もあろうが、実は私は迷った。

結局、最も常識的な「大学史を教授する教師集団全体が到達している現時点での認識の中での『守るべきもの』と『改善すべきとの』」を意味していると解して、話しを組み立て2009年1月24日には報告したし、この報告書もそう解して書くことにしたい。

## 1. 総合講座の開始と原則

1997年から私たちは自大学史教育を全学部の学生に開かれている総合講座（前期2単位、後期2単位）という形で開始した。開始するに当たって、すでに『明治大学百年史（全4巻）』が完成していたこと、それを執筆した教員の中にこの成果をどうにかして学生にも還元したいという気運が充満していたこと、執筆者の一人が大学の要職についていて、カリキュラムにかんする学内情報が入手しやすかったこと、全学部の賛同が得られたこと、こういった好条件が、明治大学のなかで満たされていたと言って良い。こうして、総合講座で明治大学史教育「日本近代史と明治大学」が和泉キャンパスから始まった。

そのときどういう条件の下で大学史教育が始まったのだろうか。難題は2つあった。1つはどのような原則で教育内容を組み立てるかという問題であり、もう1つは、どのような説明をして、意思決定機関である学部教授会を通過させるかであった。

教育内容を組み立てる原則から述べよう。原則の第1は、大学史の見方を第1時間目において、学生に明治大学の歴史を概略的につかまえさせる（概略の原則）。今日でも「大学史の見方」は第1時間目に置いてある。その第2の原則は、時系列にそって教育内容を配列することであった（時系列の原則）。従って「創設者の青春時代」が講義の劈頭にくる。

その3は、「画期的事件の原則」である。すなわち大学にとって、エポックメイキングな事件や出来事、たとえば特別監督条規、専門学校令による大学への改変、大学令による実質的大学への昇格、学部の増設、敗戦、新学則の制定、新しい建物の建設などを教育の内容として組み込んだのである。

第4の原則は、「教育重視の原則」である。すでに開発された知識、発見された事実を教授するのであって、いまだ発見されていない事件や事実を研究して教えるのではない。研究して教えるのでは、次元が異なってくる。この原則は、将来も変わることがないのではないと思う。

以上4つの原則でもって、15回の教育内容を構想しても、それは構想案が出来たにすぎない。たとえて言えば、参謀本部で作戦の見取り図が出来ただけにすぎない。大切なのは、構想した教育を実践できる人がいるかどうかである。実際に時間割を組むとき、学内者や学外者と交渉せざるを得ない。この交渉が大変なのである。交渉の過程で、担当者を変えざるを得ないケースもあった。ひどい場合には、構想案を変更せざるをえない場合も出てくる。「構想案が出来たにすぎない」と言った所以である。開始初年度の担当者は、無難に、『明治大学百年史』の執筆者があてられた。こうすることが、最も無理がないと考えたからである。

## 2. 総合講座にかんする学部教授会の討議資料

上に「簡単に全学部の賛同が得られたこと」と書いたが、もう1つの難題は、実は学部教授会をいかに通過させるかであった。各学部の教授会を通過させなければ、単位にかかわる教務の重要課題は実施できないからである。当時学部教授会で審議してもらった文書が残されているので、それを提示しよう。

（出典：「明治大学史資料センター案内」）

## 学部間共通講座「日本近代史と明治大学」開設の趣旨

1997 年 1 月 14 日

1. 明治法律学校設立の思想的背景

明治大学は、言うまでもなく、一八八一年（明治一四年）岸本辰雄、宮城浩蔵、矢代操の 3 人の創設者によって、設立された。

岸本は、「法学普及の必要なるは、余輩の贅言に俟たさる所、而して数百年封建の余弊を挙けたる我邦に在りては、命令服従の旧習、牢として抜く可からす、権利の思想殆と絶無にして、法学普及の我邦に於ける、其の必要特に大なるものあり殊に予輩新たに仏国より帰り、仏国に於ける法学の隆盛及権利思想の普及を見て、大いに健羨に堪えす、是れ余輩若干の同志か、微力自ら揣らす、敢えて本校を創立したる所以なり」と言っている。

ここには、法学をもって封建の余弊に惑わされている日本人の精神構造を改造し、国家を主体的に担う国民を育成するという決意が読みとれる。

では、こうして創設された明治大学は、日本の近代化にいかに対応してきたのであろうか。近代化とは、大ざっぱに言えば、思惟様式・生活様式の西洋化、工業化・産業化・資本主義化を意味するといってよいだろう。

本講座の趣旨は、二一世紀に生きる学生たちに、日本の近代化とは何であったのか、また近代化との関わりにおいて明治大学はいかに生きてきたのかその歴史を考察させることを通じて、学問的思考力を養成するとともに、健全な愛校心を形成することにある。

2. 現在の明治大学学生たちの精神風景

現在の学生たちは、意識的にであれ、無意識であれ、精神的より所を求めている。しかも、慶応大学や早稲田大学の創設者の名前は知っているのに、残念ながら、明治大学の創設者の名前も思想も知らない。

ところが、自分が学んでいる大学の歴史や建学の理念の話しをすると、眼を輝かせて聞き入る。自分と自分が学んでいる大学との接点を求めているのである。

こうした、明治大学に学ぶ学生たちの精神的要求に対応するためには、やはり、歴史的事実と学問的論理によって、明治大学の歴史を学ぶ場を提供する以外にはないのではないか。

3. 講座開設の効用

本講座を開設すれば、明治大学に学ぶ多くの学生たちに、本学の歴史についての学問的認識・歴史像を形成する機会を保証することができる。

しかも、それはただ単に学問的認識にとどまらず、学生諸個人と大学との一体感を作り上げ、精神的に学生と大学とを強い紐帯で結ぶことを可能にする。こうして、愛学心や UI（大学との一体感）が形成されることになる。こうした観点からすれば、各大学が自己の全存在をかけてサバイバル競争をしている状況にあって、明治大学の将来にも貢献することは確実と言えるのではないか。

さらに、二一世紀は「こころ」の時代とも言われる。つまり、こころの豊かさ、教養の時代と言ってもよいであろう。こういう時代に、明治大学で学ぶ学生たちが、自分の大学が近代日本の在り方にいかなる役割をはたしたのかということを学ぶことは、こころの豊かさ、自己の存在確認につながり、つまるところそれは自信へと発展していくであろう。

本講座の開設は、本学で学ぶ学生に、以上のような教育的効用をもたらす。本学の発展にとって、有意義と言わなければならない。

以上である。この書類で無事各学部教授会での議論を通過した。こうして自大学史教育が明治大学でも、和泉キャンパスを皮切りに、開始されることになった。

1999年には生田キャンパスと駿河台キャンパスでも開設されるに至って、ウィングをのばした。ただ、それぞれのキャンパスの特性をいかして、若干内容を変えた。たとえば、生田キャンパスには、理工と農という理科系の学部があるので、明治大学における理系教育や理系の就職などいうように、理系の学生が関心を持ちそうなテーマをいれた。

### 3. テーマ

ここに2000年度の各キャンパスのテーマと担当者を掲げておく。和泉キャンパスの授業内容は、開始と大きな変わりはない。

**2000年度 学部間共通総合講座「日本近代史と明治大学Ⅰ・Ⅱ」和泉キャンパス**

| 期日 | テーマ | 担当者 | 所属 |
|---|---|---|---|
| 4/21 | はじめに―大学史の見方 | 渡辺　隆喜 | 明治大学文学部教授 |
| /28 | 創立者の青春時代 | 渡辺　隆喜 | 明治大学文学部教授 |
| 5/12 | 明治法律学校の誕生 | 鈴木　秀幸 | 明治大学文学部講師 |
| /19 | 自由民権運動と書生たち | 鈴木　秀幸 | 明治大学文学部講師 |
| /26 | 建学の理念と校歌（大学歌） | 別府　昭郎 | 明治大学文学部教授 |
| 6/ 2 | 明治法律学校と校外生 | 別府　昭郎 | 明治大学文学部教授 |
| / 9 | 民法典論争と刑法改正問題 | 山泉　進 | 明治大学法学部教授 |
| /16 | 明治法律学校の卒業生たち | 山泉　進 | 明治大学法学部教授 |
| /30 | 明治法律学校から明治大学へ | 浅田　毅衛 | 明治大学商学部教授 |
| 7/ 7 | アジア留学生と明治大学 | 加藤　隆 | 明治大学政治経済学部教授 |
| /14 | 地方で活躍した校友たち | 鈴木　秀幸 | 明治大学文学部講師 |
| 9/29 | 大衆社会と大学問題 | 渡辺　隆喜 | 明治大学文学部教授 |
| 10/ 6 | 大正デモクラシーと明治大学 | 加藤　隆 | 明治大学政治経済学部教授 |
| /13 | 関東大震災と記念館（Lタワー） | 鈴木　秀幸 | 明治大学文学部講師 |
| /20 | 昭和恐慌と「夜間部」 | 浅田　毅衛 | 明治大学商学部教授 |
| /27 | 女子高等教育と女子部 | 後藤総一郎 | 明治大学政治経済学部教授 |
| 11/10 | 予科と和泉校舎 | 鈴木　秀幸 | 明治大学文学部講師 |
| /17 | 戦争と明治大学 | 加藤　隆 | 明治大学政治経済学部教授 |
| /24 | 昭和戦前期の学生生活 | 加藤　隆 | 明治大学政治経済学部教授 |
| 12/ 1 | 戦後改革と明治大学 | 別府　昭郎 | 明治大学文学部教授 |
| / 8 | 学生生活と自治活動 | 後藤総一郎 | 明治大学政治経済学部教授 |
| /15 | 高度成長と学生気質 | 長沼　秀明 | 明治大学文学部講師 |
| /22 | 卒業生の今と昔 | 吉田　悦志 | 明治大学政治経済学部教授 |
| 1/12 | 総括―明治大学の現状と課題 | 渡辺　隆喜 | 明治大学文学部教授 |

自大学史教育を通じて、学生たちがスムーズに大学教育に誘われれば、大学導入教育になるだろう。否むしろ、学生たちよりも新任教員にこそ自大学史教育が必要なのではないかという意見もあった。これは2009年4月に実現した。また、これは大事な授業であるから必修にしたらどうか、という意見もあったが、自主的に学ばせるということで、私は、自大学史教育を通じて、受験戦争で疲れた学生たちが自分の学ぶ大学を知り、心の居場所や体の居場所を発見出来ればいいと思っている。ひいては、それが大学と自己との一体感、UI（ユニバシティ・アイデンティティ）の確立と繋がっていくと思う。

## 4. 学生の感想

授業の受け手である学生はどのような感想をもったのであろうか。自大学史教育の受容者である学生が抱いた感想を次に掲げておこう。

「農学部4年生の感想文：私は「日本近代史と明治大学」の講義を受け、明治大学史としては、創立から現在に至るまでの道のり、創立者の目指したもの、またその大学史のバックグラウンドとして、社会情勢の変化、近代の制度における現在の社会的影響などがよく理解でき、歴史を学ぶ意義がわかった気がした。そして、近代史を学ぶといっても教科書のように、すべてに客観的なのではなく、大学史、大学生といった立場から見た、ある一定の視点から近代史を学ぶという点でも興味深いものがあった。

明治大学に入学してもう四年になってしまったが、正直なところ言うと、創立者の名前、明治法律学校設立の趣旨などほとんど知らなかったし、特に知ろうとも思わなかった。入学した時にもらった「CAMPUS HAND-BOOK」に何やら書いてあったのは覚えているが、まず読もうとは思わなかった。卒業を間近に控えた時期にこの講義を取ることになり、もう少し早くにこの講義をとっていれば、何か違ったかもしれないなという後悔と、何も知らずに卒業していくよりは良かったという気持ちが入り混じっている。

「明治大学の主義（岸本校長演説）」の中の言葉で、「即ち本学の主義は開発主義にして又自由討究主義なり、此主義の実行に現はるゝものは本学学則なり」というものに、感銘を受けた。「開発主義」「自由討究主義」と聞いても、どちらも耳慣れない言葉で説明を受けなければ聞き流してしまうところだが、どちらも、大学生活を送るうえでとても貴重な言葉であると思う。

「開発主義」については、大学生活そのものであり、自主的に学ぶ、強制はしないということは、自分で講義を選べるところ、また、勉強したくないものは、講義を聞く必要はないし、だからといって、高校までのように授業に出ないという理由で怒られることもなく、すべては自分の責任において自主的に学べるようになっており、注入主義ではないという事は明確であろう。一方「自由討究主義」だが、何がわかって何がわからないのか討論して明確にするという行為は、今ふり返ってみると、ほとんどなかったように思える。実験を除けば、ほとんどの授業が先生の講義を聞き、ノートにまとめるという作業で、ゼミに入っていない私は「討論」という形で自分の意見を言う機会はなかった。自分で講義を選べるという点では開発主義的だが、講義の形態が注入主義的であった事がマスプロ大学であるが故に仕方のないことなのかと思う。これから迎える少子化の中で、創立の主義である「自由討究主義」が普段の授業から貫かれるようになって

欲しいものである。近代史についてであるが、一番なるほどとうなずけたことは、官僚制度の仕組みである。今だに学閥主義が各企業に残ってはいるが、なぜ高級官僚と呼ばれる人たちが東大を始めとする国立大学出身者に多いのだろうと、ニュースを聞く度に思っていた。そして、この講義をとり、国立大学の前身である官学は、国の中枢を担う高級官僚養成所という立場であり、私立大学はその官僚を補佐する人材育成の場という前提があったことを知った。現在では、国立大学も、私立大学も「大学」という点で共通であり、大差はないと思っていたが、近い歴史というのは根深く現在に残っているのだとおどろかされた。この講義をとって感じたことの二つめが、現在を知る為には歴史を知らなければならないということだ。農学部の講義においては、古い知識というのは間違っているということが多く、なるべく最新の情報を教わり、その歴史を学ぶことはなかった。しかし、「現在」というものは突然現れるのではなく、過去から跡切れることなく続いていて過去の事実は間違いで、現在の生活が正しいということはない。大学へ入学してから、過去の事実をふり返るという事の大切さを忘れてしまっていたので、それがとても新鮮に感じられた。

最後に後期の講義で、「六〇年安保闘争」についての講義がとても興味深かった。テレビでは、東大の安田講堂に放水するシーンを目にした事はあったが、なぜあそこまでのデモが起ったのかは知らなかった。しかし、講義を受け、自分でもレポートを書く上で、その真相が理解でき、納得することが出来た。

この講義を一年間とってみて、最初は、『何で明治大学の歴史を学ぶのだろう？』という疑問が心の中にあったことは否定できないが、終ってみれば、内身の充実した講義であり、下級生に薦められる講義であった。この講義を取らなくとも、明治大学の主義が入学生、又は受験生に伝えられればもっといい大学になるのではないだろうか。」

## 5. 展望 ー今後の課題ー

明治大学における自大学史教育はそれなりに成果を上げていると自己評価しているが、課題がないとは言えない。今後の課題、展望についても述べておこう。

「大学史の見方」を第１時間目に置くこと、時系列で教育内容を配列すること、大学にとって、エポックメイキングな事件や出来事を教育の内容とすること、すでに開発された知識、発見された事実を教授することという４つの原則は今後も代わりがない。そのうえに付け加えるとすれば、次の４つであろう。

①トポグラフィー（大学の地理学）的要素を教育内容のなかに入れる。
②財界、法曹界、文学界、スポーツ界、芸能界などの卒業生をさらに発掘する。
③総合講座のテキストとして明治大学小史（Short History of Meiji University）を作る。
④発足当時から使用している名称「近代日本史と明治大学」を検討する必要がある。

以上である。

どう考えても「自校史教育」という言葉よりも、学問的概念装置として「自大学史教育」という言葉の方が実態に即していると思うのだが。

べっぷ　あきろう
（明治大学文学部教授・
明治大学史資料センター所長）